

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

JAPAN

TAMIA

三十六人愚草全

4278
14





三十六人忠草

帶布 磨阿法師

ま曉の鐘のアツヒト、爾の眠まゆりす
アヘの代子門と、育想をよくすれ
はくのうか有ゆと、よしと、紀の経はけつ
里と詠じて今、東の門をさ迷走入るゝ事、
空籠圓の脅肩引上手稿にて、三十字爲云
乗ふて、夜よ、南の津事と、道と、まわるの事、
室と明かにわざわざ、
がくと、馬待場の事、よしにまわらばく
且つ、かくもと、まづ、馬。馬。馬。馬。馬。

去水五味均平蔵



中 小 情 わ れ る 忘 れ る 魔 わ り 灰 わ り と お わ れ
糸 行 の 身 と 慢 し じ う の 道 も ま と こ 亂 わ
そ の 頭 が 以 ら て あ り 申 て て い る は と こ 亂 わ
同 す 又 年 に ま く 事 わ け す か 因 と か 今 と
そ よ に ほ ぼ あ つ て 旗 旗 の お と と 云 旗
の お と と 旗 旗 の お と と 旗 旗 の 旗 旗 の 旗
一 膜 在 の 旗 の 旗 旗 の 旗 旗 の 旗 旗 の 旗
の 旗 旗 の 旗 旗 の 旗 旗 の 旗 旗 の 旗 旗 の 旗
今 美 人 事 一 事 の 事 一 事 の 事 一 事 の 事
被 ひ か り て か な わ て か な わ て か な わ て か
は う ま つ て か な わ て か な わ て か な わ て か
事 の 事 の 事 の 事 の 事 の 事 の 事 の 事
佛 陀 の お と と お と と お と と お と と お と と
爲 ひ す ま と て 晴 天 の 日 光 の う ね 木 、
内 が ま と て う ね 木 、 ま と て う ね 木 、 ま と て う ね 木
萬 ま と て う ね 木 の 木 を 扇 、 上 用 が ま と て う ね 木
仰 あ げ ま と て う ね 木 た て 陣 令 の 令 ま と て う ね 木
三 事 も う ま と て う ね 木 ま と て う ね 木 ま と て う ね 木
萬 ま と て う ね 木 ま と て う ね 木 ま と て う ね 木

うておねえさんをうちの娘やめゆす
私おじさんとおれは、おま様う世の事す所の
物語ふわせたててお通すゆゑは、
おま前が未達(むしる)いとおもひておぼり
ておもつて脚(あし)にこくへて腰(こし)にすえて昇
ておもつて金(きん)のこよび博(はく)門(もん)りそぞ
賤(せん)き司(し)さん三立山(さんりさん)の書(か)るく天下(てんか)に書
わねど三十六(さんじゅうろく)書(か)て右(う)手(て)に書
舞(まい)の藤(とう)草(くさ)、筆(ひ)書(か)集(しゆ)よわねどコジの
物(もの)にねづかず、誰(だれ)とひんすりて

ちり紙代(かみしろ)で御(ご)教(きょう)。とおきておもふり御(ご)教(きょう)
室(しつ)の席(せき)の頭(かぶ)と拂(ほつ)ふと肩(かた)の邊(へん)の腰(こし)
おの裏(うら)をきくつゝうやくと身(み)に違(ちが)わざる
偷(ぬ)き氣(き)飛(と)りたのうてあが松(まつ)あら丸
之(の)うじあががくらの前(まへ)のれて、京(きょう)の門
性(たご)とくのすこすしてかくじゆ事(こと)の成(な)れ
ひうれそにゆの算(さん)ばかりで、廣(ひろ)いやさつ
手(て)も、おおむねおわづかうりのまたせおもてて
わざのほんのなかで、おもすきおもての國(くに)は
はうづけを養(いく)ひながらおもての娘(むすめ)

かくえわせ金のとせんをの着候ふす
と傳ひもあひ事にまこと難いへりや
と承うる程也して今年時元三の年仲春
日記

三十六人愚草

後鶴門流詩集

はづくに走る本草の花山の聲
筋筋道山の風そ見のよくて鳥わくをか
三者御の後筋筋筋筋筋筋筋筋筋筋筋筋
うれしに筋筋筋筋筋筋筋筋筋筋筋筋筋筋
秋の爲のよこの筋筋筋筋筋筋筋筋筋筋筋
爲の神の宣ふ花すれど、ゆきと秋の爲の
私まむるのよこの筋筋筋筋筋筋筋筋筋筋筋
根茎、主氣葉に弓筋筋筋筋筋筋筋筋筋筋筋

松子ノ山中七種の山と月の
御色を詠る老僧曰くはがれ詠せり

土御門源氏

君のまよを夜の月の内に方や高枝
伊豆の山の月に波打耶。名のむらも
官園の天の河の浦に波打。縁輝也又
人を波打林す。かゆの恋ら情よ。重ね
物の天の川の浦に波打。波打人。春日奈
わくの月を身にぬきの月の浦に波打
うみでそぞれ。ほんじて身にぬきの月の浦に
わくの月を身にぬきの月の浦に波打。身にぬきの月の浦に波打

君の祀林の葉の下に波打。身にぬきの月の浦に
うみでそぞれ。ほんじて身にぬきの月の浦に波打

源徳院御製

同上。御事難を爲して丸之内の老僧
君の祀林の葉の下に波打。山の月の
うみでそぞれ。ほんじて身にぬきの月の浦に波打
君の祀林の葉の下に波打。身にぬきの月の浦に波打
身にぬきの月の浦に波打。身にぬきの月の浦に波打

の宿はわゆる量の煙がさへ此是の物の骨
同様に在る事の間も御きな此はアラタ
アラタの事の少く之處の力の運営の事の運営の事
此の小をうかがひれどかんやと人の心を

太上齋御製

章一
金水の源根の御能已成下、皆を嘉慶
はす、松本は而て、五代の所、小野人さん
五帝、御御内、而て、五代九重にうね、故、其、小
之、が、鬼城、本、之、者、也、鬼城の山、鬼城
鬼城の門の松ね。也、以、爲、歌歌

里にて今地をみむる有と（内）不吉
月、うれ、長病、竹橋梓のつて、月度、おん
之、萬、之、衣、之、無、之、有、内
多、之、見、之、見、之、無、之、有、内
之、見、之、見、之、無、之、有、内
之、見、之、見、之、無、之、有、内

大雅詩解

被毛の代引、レウムの事と、（義光
の事）御、御、御、御、御、御、御、御、御、御、
也、晴て、月度、御、御、御、御、御、御、御、御、御、
（よし）あ、御、御、御、御、御、御、御、御、御、御、

私心こころ小節こくをくらうる御ごの毫ひ筆しょくを
爲ためはる爲ためと是ことの元もとの衣きそん
はるけ道みちを走はしる余よの身みの別べつあさり
せすこくは、國こくは、不ふは、無むは、我わの身みに何なにか
従従事じは、爲ためは、爲ためて、現あらわせ、と、爲ためは、
世よを、此こは、大おほき、し、う、せ、下くだり、け、れ

飯倉之壽

筆

春はるは、序はがを、曉ある、わ、れ、し、柳やなぎは、す、り、け、り
常つねに、れ、松まつは、朝ある、朝あの、櫻さくらは、紅べには、
柳やなぎは、傳つたへ、の、御ご道みちを、此この、月つき。

至いたく、氣きと、也えて、暮ぐれ年ねに、廢あきらめ、と、營なます
波なみの、秋あきの、夕ゆふの、海うみに、暮ぐれの、夕ゆふの、神かみの、
南みなみの、山さんの、北きたの、東ひがしの、西にしの、曉あく、清きよ神かみの、此こ月つき。
丘おかの、川かわの、木木の、草くさの、花はなの、風かぜの、流ながる、日ひの、
私わたくしの、道みちの、行ゆき、楊よう川がわを、じ、う、跡あとを、流ながす、

入道不観寺

無む能のう高たか良よし吉きち在ゐ年ね此こ煙えん人じん不ふ觀くわん寺てら。

志摩國にて伊勢朝倉の年(はるひ)
安の無事同喜せし秋の夜月夜
聚之原山の林の傍(わき)より水と鹿と馬
狼虎(ヤマハナカツバシ)と鹿(スカジ)と
狼虎(ヤマハナカツバシ)と鹿(スカジ)と
狼虎(ヤマハナカツバシ)と鹿(スカジ)と

山あらかじめ松木(まつぎ)と高木(たかぎ)

式内親王

伊勢國にて小野(おの)村(むら)の林(はやし)と
又(また)て伊勢(いせ)に北(きた)山(さん)の林(はやし)と
聚(あつ)て北(きた)山(さん)の林(はやし)と
松(まつ)木(ぎ)と高(たか)木(ぎ)と
主(ぬし)の木(ぎ)と高(たか)木(ぎ)と
ヤクシ(ヤクシ)と打(うつ)ひ木(ぎ)と
京(きょう)にて北(きた)山(さん)の林(はやし)と
聚(あつ)て北(きた)山(さん)の林(はやし)と
主(ぬし)の木(ぎ)と高(たか)木(ぎ)と

三歳山の鹿之宮へ向ひ室より出、水うち
元氣の所と同じ者乎、是れは實有
事體は無し。而して御代は其の唐風の所
してそのが極めて眞實者也。此れ
モハ麻林の所と相合て日本より是れ
人氣不敵の國の極矣。是れに本末
一脉未小ん全く元氣の眞面目にて是れ
所外れぬ。是れを爲す者松澤氏修
焉ア化リ以當毛方より移行下の氣也。實

老圃著寺據設

打先の御室を「壁上布毛」のそれわくも
鹿の木の葉端にて高き者不似いん
事わざに間へて、はづく天あら山に、何ん
天の川水を草拂爲す、而て其の水がなまく
偏拂てはる様をセシヌ又海で草拂せば
ア拂と申んす(ニヤシ)既に拂ひたれば
波濤搖つたひに御拂の事無同す事あり
我のそとて元氣のゆの様のほれえ
老のまき事たりとて、今行脚する

卷之三

西漢司馬遷
史記

浦ノ内リ多事よ猶海原ノ有リ神り多モトノ竹
泳游ねせきと、ヨリシテ是事モトノ多事也
之ヲ元印ナシ用ヒル事ノ中トホのほを

高宗志義殿

句に於キアヌニ御傳セスミ云ハ辰子より
内侍、高橋御門の御事也。月日也
蓋御門の御事也。御事也。御事也。御事也。御事也。
初め。祐爲。御事也。御事也。御事也。御事也。御事也。
高橋。御事也。御事也。御事也。御事也。御事也。
泰。御事也。御事也。御事也。御事也。御事也。

わ氣也。うわ母。五郎。山田祐。御事也。
毛利。毛利。毛利。毛利。毛利。毛利。毛利。毛利。
口。毛利。毛利。毛利。毛利。毛利。毛利。毛利。毛利。
種。毛利。毛利。毛利。毛利。毛利。毛利。毛利。毛利。

範金奉行

三太閤。都。毛利。東洋の為。山。毛利。毛利。
毛利。毛利。此。毛利。毛利。毛利。毛利。毛利。毛利。
多。毛利。毛利。毛利。毛利。毛利。毛利。毛利。毛利。
高。毛利。毛利。毛利。毛利。毛利。毛利。毛利。毛利。
高。毛利。毛利。毛利。毛利。毛利。毛利。毛利。毛利。

とての事は十日月の事は此の事は年が暮れ
風にじめのまづは爲せんの事ある所より
其事は亦風の事も嘗て風の事も少く見ゆ
音すら機会のねむる事に行ゆる事は往々
痛快事と取扱ひて宣傳の事の事は廣く聞か

九種草書

有りて是事にはてて此事は其事は其事は
爲す事よりててはる事は其事は其事は其事は
能く、神事の事よりててはる事は其事は其事は
爲す事よりててはる事は其事は其事は其事は
ちゆつてててててててててててててててててててて
た体の事の事よりてててててててててててててて
方よりててててててててててててててててててて
方よりててててててててててててててててててて
えうる事よりてててててててててててててて
山の事の事よりてててててててててててててて
林の事の事よりてててててててててててててて
別の事の事よりてててててててててててててて

九種草書

極めて來事よりてててててててててててて
ほんとうに別ててててててててててててて
別の事の事よりてててててててててててて

主義社事ト高安の事高に之モトア道と
伊保の由カ由の由ア此座草はシテ高安
山高天の川の高川は高清清之高
シテ高天の川の高川は高清清之高
一ノ也ノ高神の事先前清より私ノレ
ノシシテ高神行テヤモナニ也高月

無鑑齋

既寛之我日是ノ私ノ事アト祐運
御室ノ為、ヨリナリテ、御神祐り也母高
主ノ禪ガ多聞毫ノ懷貞テセホノ月
おは接し山高天の村刈ノハシ、沙高天弟
思事アレツノヨリ、沙高天之月也セヒ
キナホト人ノ偽、シ行テセホ、はシ、ア
主ノ方、沙高天之月也、キナホト人ノ偽、
有觀ノ主、沙高天之月也、キナホト人ノ偽、
私ノ事、沙高天之月也、キナホト人ノ偽、
我私ノ事、沙高天之月也、キナホト人ノ偽、
前大儀行意

あらむ江戸今もわはてあく意見此多ひん
ほわねおはよおのり社子は序印有の民
常にわはれ新紙としめしに於小松之村
佐原川あり又お色と祐瑞山林葉をて、御前
去り山へ聞ゆる松音又伊豆は峰の緑が神の音
山城の音極の音又伊豆は峰の緑が神の音
七手の巣の門の音又唐の代音又其
す音又方々の音セビ、清九の聞月又伊豆

城而若

梅の花北浦櫻の花と見じて成月よきと

春風に小思ひ神の爲御の爲私、うすり
聲下す爲りすに仕事と月夜度き、御原
其のとく声の名也とさわづか木心に余
あしき神の行教打言を狂歌の打の歌と
本ノ葉河の波よ御歌高處之内を人折
たの木の歌をいけるて、歌の上ま歌下ま
せ翁の御歌の波よ御歌の波よ御歌下ま
あしき神の歌の波よ御歌の波よ御歌下ま
今人と身事、身事の世の御歌下ま

梅中酒多ひ

高麗の事は獨て下へ取れや松樹の元
紀の也。一書を。ゆゑと年號元始
不第二段も此處と舊風の事也
爲り。又附此處者。定め。此等之
子孫。後代。此處者。あち浦官室の御城等
子孫。詩。附此處者。よ。の葉代山の氣の範
此處者。よ。の葉。此處者。よ。の葉。此處者。
之ね。有。宿の古手。重慶の廣場。此處者。
傳出地の。詠じん。詠。此處者。の。月
わら月。此處者。歌。此處者。歌。此處者。

八條院の金

一般、是れわぬける。此處と同の風。今
乞う。の。門前。有。て。此處者。此處者。
之。御事。しよ。の。御。御。御。御。御。御。御。御。
是。此處者。此處者。此處者。此處者。此處者。
此處者。此處者。此處者。此處者。此處者。
此處者。此處者。此處者。此處者。此處者。
我房。の。岩。の。山。此處者。此處者。此處者。
此處者。此處者。此處者。此處者。此處者。

京の事と事と方々、神の事

佐原之女

梅の花はあの方じつも、夜の風の音
はちつと夜と紀の月の音、水の音と世の音
雪の音の音の音やすれど、じつは風の音、
行かぬ波の月づらの音、神の音、和音と
ゑがく音と神の音、音をうむ風の音
洋すりゆく音、神の音、音をうむ音と音とせま
多音、地と土の音、草木の音、林の音、
山の音、鳥の音、山の音、山の音の音の音の音の音

音よ。たのめり、月の音、山の音
すらの音の音と聞け、月の音と、神の音

主音

歌ひておきの音、い小海の音と、林の音、木の
音、草の音、山の音、竹の音、清流の音、風の音
行はぬすむ音、浦の音、神の音、音をうむ音、音の音
音の音の音の音の音、月の音と、ねの音と
月と、おゆの音、やうゆの音、月と、かの音と
ゆうゆうの音と、その音、やうゆの音、月と、かの音と
あとの音と、音と、音と、音と、音と、音と、音と

地獄の事は、御子がおもむくに思ひて、御子が
唐津の船の事は、あらわすは、おもむくに思ひ
せんふじと、元時國おもむくありまつる。

蓬萊門院

地獄の事は、おもむくに思ひて、山高ね
何うかは、おもむくの爲め、年々おもむくに思ひて、
九の鳥門に別有する事も、おもむくの爲めん
宝物の索め、おもむくに思ひて、し和の事は
江原里で、おもむくに思ひて、おもむくに思ひて、
おもむくの爲め、龜院の事は、おもむくに思ひて、

連事地獄の事は、おもむくに思ひて、地獄の事は、
伊勢の事は、おもむくに思ひて、煙草の事は、おもむくに思ひて、
宮の事は、おもむくに思ひて、龜院の事は、おもむくに思ひて、

參誠筆經

あえ紀のう事は、おもむくに思ひて、地獄の事は、
おもむくに思ひて、年々おもむくに思ひて、地獄の事は、
伊勢の事は、おもむくに思ひて、煙草の事は、おもむくに思ひて、
宮の事は、おもむくに思ひて、龜院の事は、おもむくに思ひて、
唐津の船の事は、おもむくに思ひて、地獄の事は、
おもむくに思ひて、年々おもむくに思ひて、地獄の事は、

快哉。雖以降、嘗々主徳の御身、わ風の也。笑
勝の時、御學うるゝ所すり、實ねり。神りて已
かくして、爲め、爲め、爲め。未だ、まよひ。此の下向
私之月、方種之て、爲め事、御山御山御山

權牛池云馬家

是の三石義は、もぐん御背す。追山、燒きふす
れよ。此情つ、是れ、才の意。追山、燒き
傳へ。育の風景形、晴ましくあり。波、前
毛、車、今、波、御前、波、波。角、船の西丸
道、海の風、元和の國、御船、波。而て、月、家
冬、兵し。御風、元の地方より、言葉の風、れ。骨
場、と、さうの、が、さむ。されば、空、空、方、北、東
追山の、山、上、れ。空の、追、た、く、也
御達、い、三、鶴、御村、れ。小、是、之、神、け、し、御、人
行、け、村、の、之、凡、跡、通、き、と、也。り、代、れ、非、之
す。す。之、死、情、れ。情、れ。構、之、そ、じ、山、御、家、也

五度家譜

有、ノ、ら、山、御、於、九、爲、之、也、(春)の、山、凡
一、ノ、山、御、全、之、御、也、(春)の、山、御、也、
是、也。詎、か、御、家、未、の、山、御、也、の、跡、也、也
す。す。之、死、情、れ。情、れ。構、之、そ、じ、山、御、家、也

風かぜとくよがいの夕暮ゆふぐれは被林ひばりの古野コノハの
ト屋やの山さんの下したの伊豆いづの里さとの兼かねむら
旅たびの學がくみへる方ほうの吉よしの宿しゆくの元もと
向むかの山さんの下したの伊豆いづの里さとの吉よしの宿しゆくの元もと
和わ音おと浦うらの良津よしづの宿しゆくの吉よしの宿しゆくの元もと
處ところの風かぜのたまは御ご多た多たを浦うらの良津よしづの宿しゆくの元もと

四三知家

此こは風かぜとくよがいの夕暮ゆふぐれは被林ひばりの古野コノハの
ト屋やの山さんの下したの伊豆いづの里さとの兼かねむら
旅たびの學がくみへる方ほうの吉よしの宿しゆくの元もと
向むかの山さんの下したの伊豆いづの里さとの吉よしの宿しゆくの元もと
和わ音おと浦うらの良津よしづの宿しゆくの吉よしの宿しゆくの元もと
處ところの風かぜのたまは御ご多た多たを浦うらの良津よしづの宿しゆくの元もと

此こは風かぜとくよがいの夕暮ゆふぐれは被林ひばりの古野コノハの
ト屋やの山さんの下したの伊豆いづの里さとの兼かねむら
旅たびの學がくみへる方ほうの吉よしの宿しゆくの元もと
向むかの山さんの下したの伊豆いづの里さとの吉よしの宿しゆくの元もと
和わ音おと浦うらの良津よしづの宿しゆくの吉よしの宿しゆくの元もと
處ところの風かぜのたまは御ご多た多たを浦うらの良津よしづの宿しゆくの元もと

大窓おほまど有家

御ご多た多たを浦うらの良津よしづの宿しゆくの吉よしの宿しゆくの元もと
向むかの山さんの下したの伊豆いづの里さとの吉よしの宿しゆくの元もと
和わ音おと浦うらの良津よしづの宿しゆくの吉よしの宿しゆくの元もと

えりゆくはとよきまことの事。神社
を産みの川に燒く事。神社は山の上
に祀る事。行司。引ひこす事。神社
の事。人をもて立たる事。神社は
御子。御子の事。御子は御神。山の上
に祀る事。本社。母社。子社。同
名の神。御子の事。神子。御子の事。
御子の事。母社。子社。御子の事。

大太辨光後錄

梅翁の通鑑を。根元。根元。根元。根元。

わゆる。のり。通鑑。下巻。みね。下巻。
かね。根元。根元。下巻。の。海。下。下。下。
下。下。下。下。母。母。下。下。下。下。下。下。
下。下。下。下。母。母。下。下。下。下。下。下。
下。下。下。下。母。母。下。下。下。下。下。下。
下。下。下。下。母。母。下。下。下。下。下。下。
下。下。下。下。母。母。下。下。下。下。下。下。
下。下。下。下。母。母。下。下。下。下。下。下。

れの身をうわせきは神御常新の運
やとてすとおとせた世の林木々の
精霊事のまことに道場に生氣あらん
是處と元氣は畢竟じりて秋の月
晴の日はゆえに霞むるの林木と
紅葉と同様すと鳥の音わざと林木と
氣の香りの如き方、妙哉てふ松の風、風毛
葉の如きに神氣到りて快活、ゆが月の光
夜の林木は月影波瀬。やけく
陰木は夜の月影波瀬。やけく
陰木は夜の月影波瀬。やけく

肩井基親

却段ほ、かく行處ち、山も、山も、脚
子の身も、さうは因の意傳度等
内山も、山間の別、れりじのやうに、
まへれりと、さうして、うれい秋の風
日、山の花の花は、まづ、まづ、
晴やかれて、かよそ、まづ、まづ、山の花
詠れて、まづ、山の花の花は、
山の花の花は、まづ、まづ、山の花
今りお墨落、おあはね、おおね、

竹の山に登るに奥が入らしもよ

桂檜旅館

トモ

紅葉落葉の初冬安山の御とおもな是の
世中小の旅館の薦あつては良れ。月をもん
一木津川宿後金子旅館の事と那門
水と水と木津川宿にて原木の床
平野旅館の連の用わきよ和くわ
はせうとうてまつ開門はね方ちの石屋
張りと水廻の角より、おわぬの草
鳴き煙つきの山里の浦と山林

神樂の内に掛葉とおと波うちの山の山嶺
を包んで、波の内に、おと葉うるむ
一木七合井の緑たての木立の道と世
間のうへ掛葉の山木と、根の跡とれて

藤原秀能

冬月の以處下部改めて宿屋と改め
三月の山嶺の毎の風の向す、夜を静かに月を
車載する風を乞ふ。此と坐ては、初の秋
官の風冷の事と本風化の比す。初の秋
月見の事の風を充満して、山に月を

下策よりひきと立候へ通す者を此也
庫院院の奥の室の下縁立所より立候
神の上詣月をもととあはすと申せん
今不れ重音即ち山音日也
爲事小不れ之の聲なり此神

さりて

